珍しい酒もり

小川未明

青空文庫

北の国の王さまは、なにか目をたのしませ、心を喜ばせるような、おもしろいことはないものかと思っていられました。毎日、毎日、同じような、単調な景色を見ることに怠屈されたのであります。

このとき、南の国へ使いにいった、家来が帰ってまいりました。なにかおもしろい話を持ってこないかと、さっそく、その家来にご面会になりました。

「ご苦労だった。無事にいってこられて、なにより、けっこうのことだ。南の国王は、達者でいらせられたか……。」と、おたずねになりました。

家来は、長い旅をしたので、顔の色は、日に焼けて、頭髪は、雨や、風に、たびたび遇うたことを思わせるように、伸びて乱れていました。

「南の国王は、お達者でいらせられます。そして、毎日、愉快にお暮らしになっていらせられます。帰ったら、よろしく申しあげてくれいとの、お言葉でありました。」と、家来は、申しあげました。

北の国の王さまは、うなずかれてから、

「それは、けっこうなことだ。しかし、ほんとうに南の国王は、愉快に日を送って、おいでなされるか？」と、問いました。

家来は、両手を下について、

「毎日、それはそれは愉快に、日を暮らしていらせられます。南の方は、こちらよりは、ずっと日が長いように思われますが、それでも、国王は、短いといって、嘆いていられたほどであります……。」と、お答え申したのでした。

北の国王は、不思議のように思われました。自分には、どうして南の国のような、楽しいことがないのだろうかと、かなしく思われたのでした。

「自分は、明けても、暮れても、この単調な景色を見るのに飽きてしまった。やがて、広い野原は、雪におおわれることであろう。どうして、自分には、そうしたおもしろいことがないのであろうか?」と、おっしゃられました。

家来は、王さまの顔を見上げながら、

「南の国王も、かつては、お怠屈でいらせられたようでございます。しかるに、一度、城下にさまよっています、あらゆる哀れな宿なしどもをお集めなされて、ごちそうなされ、彼らが見たり、聞いたりした、珍しいことを、なんなりと言上いたせよと、命令あったために、彼らは、いろいろのことを申しあげたのでありました。彼ら、宿なしどもは、北といわず、南といわず、西といわず、東といわず、平常諸方をあるきまわっていますから、世の中の不思議なことを知っていました。また、彼らの中には、まれには、学者のおちぶれも、まじっていますので、およびもつかない天界のことや、または吉凶の予言みたいなことまでも申しあげます。……それ以来というもの、国王は、世の中の、いろいろなことに、ご興味をもたせられて、あ

るときは、ご旅行をあそばされ、またあるときは、ご研究に月日をお費やしあそばされるというふうでありました……。」と、申しあげました。

北の国の王さまは、しばらく、頭を傾けて、お考えなされました。

「なるほど、みょうなところへお気をつかれたものだ。それで、彼らは、どんな話を言上いたしたか、それをば聞かなかったか……。」と、王さまはいわれたのです。

家来は、いま、そのことを申しあげようと思っていましたから、すぐに、

「私が、こちらへ帰ります時分には、王は、南の島へ船を出されて、その島の山谷に咲いているらんの花をとりにまいられました。その美しいことは、いかなる花も比較にならず、また、その香りの高いことは、谷を渡って吹いてくる風に、花の咲いていることが知れるほどです……。また、笛を、吹くと踊りだす、白いへびのすんでいるところや、人間の言葉をまねする鳥の巣のありかなどを、彼らは申しあげたので、王は、それらを猟をされにお出かけになったのであります……。」

「それは、さだめしおもしろいことであろう。しかし、そうしたあそびごとも、南国だからされるのである。こちらのように、半年は冬、半年は夏というような国には、そんな鳥もすんでいなければ、珍しい花も咲いていない。ほんとうに、こういう国土に生まれたものの不しあわせというものだ。」と、北の国の王さまは、いわれたのであります。

家来は、うつむいて、しばらく考えているようすでありました。

「しかし、わが王さま、また、この寒い国には、別な珍しいものがありましょう。一度、この国の宿なしどもを、お招きになり、ごちそうなされたら、また、いかなる珍しい話を、お聞きなさらぬともかぎりますまい。」と、申しあげました。

「それも、おもしろい企てにはちがいないが、この地方の宿なしどもは、そんな珍しい話を持っているようにも思われない……。」と、王さまは、いわれて、すぐに、お呼びなさろうとはなされませんでした。

しだいに寒くなって、いつしか冬とはなりました。空は、くらく、野原には、風が、枯れた枝にさけんでいました。

王さまは、毎日、このさびしい、寒い景色を見て、日を暮らすことに怠屈なされました。雪が降ってきて、あたりは真っ白になり、やがて、その年も暮れて、正月になろうとしたのであります。

「どんなにか、宿なしどもや、乞食らが、この寒さになやんでいることだろう。彼らは、楽しいお正月を迎えることもできない。なかには、災難から、そうおちぶれてしまったものもあろう。事情を聞いたら、いずれも、気の毒なものばかりのように思われる。彼らからいろいろの話を聞くだけでも無益ではないであろうから、正月には、彼らを招いて、ひとつ盛大な宴会を開いて、みようと思う……。」

王さまは、こんなことを頭の中に描かれました。そして、その旨をさっそく、家来たちに申

しわたされたのであります。

家来たちは、いずれも、そのお考えなされたことが、たいへんによいことであり、また、おもしろいことだといわぬものはなかったのです。

「いや、北の国には、また、南の国と違った、いろいろの不思議なこと、珍しいことがあるであろう。はやく王さまに、宿なしどもや、乞食の申しあげることを自分らも聞きたいものだ。」と、南の国へ使いにいって帰ってきた、家来などはいったのであります。

しかし、北の方の王さまは、なんとなく、それほどの期待をされていませんでした。いよいよ王さまが宿なしどもや、乞食どもを、お招きなされて、盛大なご宴会を開かれるというふれが、いたるところに、はられましたから、すきな酒も飲めずに、貧乏に苦しんでいる人たちは、しかも、王さまのお召しで、たくさん好きなものをいただけるというのだから、たいへんにありがたいことと思って、その日の至るのを喜んで待っていました。

ここに、だれもゆかないような、さびしい海岸に、波で打ち上げられたものか、こわれた船がある、その中に住んでいる老人がありました。この老人は、いつごろから、そこに住んでいるのか、だれも知ったものがありません。そして、ようすから見て、どうやら、この地方の人ではないようにも思われました。

ある日、この老人は、村の方へ出てゆきました。そして、王さまが宿なしどもや、乞食たちをお集めなされて、正月のご宴を開かれるということを聞いたのです。

「私も、ぜひまいってみたいものだ。」と、老人はいいました。

どこからともなく、たくさんの怪しげなふうをした人間が、城下へ集まってまいりました。毎日、毎日、雪道をあるいて、遠くから、ぞろぞろと入ってきました。

やがて、正月となり、その日とはなったのです。さすがに、広い、大きな、御殿へも、これらの人たちは、はいりきれなかったのでした。しかたなく、雪の上へ、むしろを敷いて、その上にすわらなければならなかった。

王さまのお言葉で、みんなに、上等の酒がふるまわれました。そこで、その日ばかりは、特別に無礼のことのないかぎり、彼らはくつろいで飲んでも、いいとのことであったから、みんなは、上機嫌になってしまいました。

そのとき、家来は、立ち上がって、彼らに向かって、

「王さまのお言葉である。いままで不思議と思ったこと、珍しいと思ったことがあったら、だれでも、そこで話すがいい。王さまは、この世の中の不思議なこと、珍しいことを知りたいと仰せらるるのだ。」といいました。

いい機嫌になって、くつろいで話をしていました彼らは、急に、静かになってしまいました。そして、たがいに、顔を見合わしているばかりで、立ち上がって、不思議なことや、珍しいことを語ろうとするものがありませんでした。

「なにも申しあげずに、だまっているのは、かえって、無礼に当たるぞ！」と、家来は、また、

大きな声を出して、みんなを見まわしながらいいました。

そのとき、みすぼらしいふうをした一人の男が、立ち上がりました。

「ある寒い晩のこと、私は、森の中で、眠れずに目をさましていました。すると、真夜中ごろのこと、すさまじい音がして、星が、森の中へ落ちました。私は、星が落ちたのを見たことは、はじめてです。夜の明けるのを待って、昨夜、星の落ちた場所へいってみますと、土の中に底光りのする石がうまっていました。掘り出してみると、さるの顔に似た形をしていました……。」

このとき、王さまは、

「その石をどうした？　……まだ、持っているか。」といわれました。

「あまり、気味のいいものでありませんから、海の中へ投げ捨ててしまいました。すると、その日から三日間ばかり、海があれたのであります……。」と、みすぼらしい男は、答えました。

「やれやれ、そんな珍しいものを捨てて惜しいことをしたな。」と、王さまは、いわれたのです。

つぎに、また、みすぼらしいふうをした、ほかの男が立ち上がりました。みんなは、その男が、どんな話をするだろうかとながめていました。

「北の小さな町へ、山から、白くまが出てきたときは、町では大騒ぎをしました。町の人は、どうしても、その白くまを殺してしまわなければならぬといって追いました。

白くまは、どんどん逃げてゆきました。海は凍って、すでに氷の原となっていました。くまは、氷の上を走ってゆきました。すると、沖の方は氷がわれていて、その間に、黒い島が現れていました。くまは氷のかたまりの上を飛んで、その黒い島の上へ登ってしまいました。町の人々は、そこまでは、ゆくことができませんでした。しかし、白くまの上がった島は、くじらの背だったのです。そのうちに、くじらは、白くまを背中に乗せたまま、沖の方へだんだん動いていったのでした……。」

「それは、珍しい話だ。」と、王さまは、笑われました。

こんどは、彼らの踊りや、唄を聞きたいものだと、王さまは、仰せられたのであります。

「王さまのお許しであるから、唄をうたいたいものはうたい、踊りたいものは、おどるがいいぞ。」と、家来は伝えました。

彼らは、いろいろの唄をうたい、さまざまの踊りを、ごらんに入れたのです。王さまは、ひじょうに、ご満足なされて、

「ときどきこれから、こういう催しをすることにいたそう。」といわれました。そして、御殿から、外の広場へと出られて、みんなが、雪の上でもうたい、踊っているのを、ごらんぜられたのであります。

ちょうど、このとき、一人の老人が、大きな袋のようなものを脊負って、破れた、マンドリンに合わせて踊っていました。その踊りも変わっていれば、また、マンドリンの音も、さびし

いうちになんともいえない陽気なところがある不思議な音でした。

「あの大きな袋の中には、なにがはいっているのか？」と、家来におたずねになりました。

家来にも、そればかりは、わかりませんでしたから、かたわらの人々に聞きますと、やはり、だれも知っているものがありません。

「いや、たぶん、きっと珍しい宝物がはいっているのだろう……べつに、問わなくともよい。」と、王さまは、笑われて、あちらへいってしまわれました。

やがて、踊りが終わると、乞食の一人が、おじいさんに、その袋の中には、なにがはいっているかと、たずねました。

おじいさんは、耳が遠いのか、それとも言葉が通じないのか、ただにやにや笑っているばかりです。宿なしどもの一人は、おじいさんの気のつかない間に、袋のすみに小さな穴を明けて、その中のものを見ようとしました。すると、中からは小粒の黒い種子のようなものが、こぼれてきました。

「なんだ、つまらない！」と、そのものは、つばをしました。

いつしか、日が暮れかけたので、酒もりも終わりを告げ、みんなは、ふたたびどこへともなく散ってしまったのです。

おじいさんは、大きな袋を脊負って、広い雪の野原を通って、破船の横たわる海岸を指して帰りました。袋のすみに、小さな穴の明いていることに気づかなかったから、おじいさんが歩

くたびに、黒い種子が、ぼろぼろと雪の上にこぼれたのでした。

ちらちらと、雪が降ってきて、こぼれた黒い種子をみんな隠してしまいました。おじいさんが、袋の軽くなったのに、はじめて、気がついたときは、どうすることもできなかったのであります。

長い冬が、いつしか過ぎて夏がきました。そのとき、いままでさびしかった広い野原に、急に浮き出たように、紅・黄・白・紫、いろいろの珍しい花が、絵のごとく美しく咲き乱れたのでした。

世界じゅうを、あちら、こちら、歩いて、珍しい花の種子を集めて、おじいさんは東の方の故郷へ帰る途中で、この海岸で難船したのでした。

王さまは、その話を聞かれると、気の毒に思われ、厚くおじいさんをいたわられて、船に乗せて故郷へ帰してやられました。しかし、その花の野原は、いつまでも、王さまの心をなぐさめたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集　6」講談社
　　1977（昭和52）年4月10日第1刷
底本の親本：「未明童話集　4」丸善
　　1930（昭和5）年7月
※表題は底本では、「珍《めずら》しい酒《さか》もり」となっています。
入力：特定非営利活動法人はるかぜ
校正：栗田美恵子
2019年5月28日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（https://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

珍しい酒もり

小川未明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　https://aohelp.club/
BiliBili　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/